



“東北農食産学連携ネットワーク” 第 38 号をお届けします。
第 38 号では、東北ハイテク研セミナー「オタネニンジンの復権と新しい展開に向けて」について報告します。(1.8.30 於：会津若松市、参加者33名)

開催目的

オタネニンジンは今から300年ほど前の享保年間に会津藩により生産が奨励されて以来、会津地方の特産品として定着してきました。

また、オタネニンジンは多くの健康機能性成分を含有することで知られていますが、最近は需要の拡大を目指して、新規の用途開発を目指した研究が展開されています。

しかし、栽培には高度な技術を要し、栽培期間が4年以上と長く、加えて生産者の高齢化のため、平成2年には150tを超えていた生産量が、平成29年には10tに満たなくなり、四半世紀の間の減少は著しいものがあります。

そこで、オタネニンジンの今後の生産拡大に向けて、栽培の現状と問題点や新しい用途などに関する情報を共有するためのセミナーを開催しました。

プログラム

テーマ：「オタネニンジンの復権と新しい展開に向けて」

<講演・話題提供>

講演1 福島県におけるオタネニンジン生産の現状

長浜 友佳 氏：福島県農業総合センター 会津地域研究所 研究員

講演2 オタネニンジン生産に向けた研究状況と技術的課題

久保 堅司 氏：(国研) 農研機構 東北農業研究センター 農業放射線研究センター
上級研究員

講演3 オタネニンジンの薬用成分に着目した新しい利用技術

秋葉 秀一郎 氏：福島県立医科大学 会津医療センター 漢方医学講座 助教

<講演内容>

講演 1 では、福島県農業総合センター会津地域研究所の長浜研究員から福島県会津地域におけるオタネニンジン生産の歴史と現状、現在開発中の新しい技術が紹介された。長く栽培されている作物でありながら、作物の生理などの研究がほとんど手つかずの状況であり、新しい栽培技術開発の可能性が高いことが強調された。



福島県におけるオタネニンジン生産の現状について語る長浜友佳氏

講演 2 では、(国研)農研機構東北農業研究センターの久保氏から、現在進行中の農林水産省委託プロジェクト「薬用植物の国内生産拡大に向けた技術の開発」が紹介された。その中で、長野県と福島県では生育がかなり異なることにカルシウムが何らかの影響があるのではないかという指摘は非常に興味深かった。



オタネニンジン研究の現状と技術的課題について語る久保堅司氏

講演 3 では、福島県立医科大学会津医療センターの秋葉氏から生薬として利用されるオタネニンジンの可能性と問題点が紹介され、厚労省が定める薬価と原料価格の間に乖離があり、これが生産意欲に悪影響を及ぼしているのではないかとの指摘があった。



オタネニンジン薬用成分着目した利用技術について語る秋葉秀一郎氏



←講演後は、オタネニンジン生産者の方から指摘された栽培、販売上の問題点を中心に活発な議論がおこなわれました。

なお、本セミナーで発表の内容につきまして、講師の方からご承諾をいただき講演資料として、当研究会のHP (URL : <http://tohoku-hightech.jp/>) に掲載しております。